

Program notes

ラフマニノフ *S. Rachmaninov*

ピアノ・ソナタ 第1番 ニ短調 Op.28

ロシアの作曲家セルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)は、ピアノ協奏曲第2番(1901年初演)の大成功で自信を深め、ピアニスト、作曲家、指揮者として精力的に活動していた。1904年にモスクワのボリショイ劇場の指揮者に就任したが、ロシア第一次革命の政治的混乱をきっかけに1906年秋にロシアを離れ、家族でドレスデンに移り住んだ。ここでは創作活動に集中し、交響曲第2番(1906～07年)や交響詩「死の島」(1909年)などが書かれた。

ピアノ・ソナタ第1番は、1907年にわずか1ヵ月で作曲された。ゲーテの戯曲「ファウスト」から着想を得て、リストの「ファウスト交響曲」のように、第1楽章がファウスト、第2楽章がマルグリート(愛称グレートヒェン)、第3楽章が悪魔メフィストフェレスとして構想された。その後、友人たちの助言を受けて大幅な改訂が行われ、1908年10月17日にモスクワで、友人のピアニスト、コンスタンティン・イグムノフによって初演された。

第1楽章 (アレグロ・モデラート、ニ短調) 強弱の対比を際立たせた序奏の後、和音が重々しく響く第1主題が現れ、16分音符の急速なパッセージをはさみ発展する。たっぷりとした第2主題(変ロ長調)は、細やかな動きのなかからユニゾンで浮かびあがる。これら二つの主題が、テンポを巧みに変化させながらダイナミックに展開していく。

第2楽章 (レント、ヘ長調) ゆるやかな三連符の動きの合間から、心温まるやわらかな旋律が現れる。中間部は左手の伴奏がいつそう細くなり、カデンツァ風のパッセージを経て冒頭の旋律が戻ってくる。コーダの輝くような連続するトリルが美しい。

第3楽章 (アレグロ・モルト、ニ短調) 冒頭の力強く下行する和音に導かれ、活発な第1主題が勢いよく進んでいき、しばらくするとグレゴリオ聖歌の「怒りの日(ディエス・イレ)」をもとにした付点のリズムによる第2主題が現れる。ラフマニノフらしいロマンティックな表情もみせるが、華麗な技巧が終始全体を圧倒している。

幻想的小品集 Op.3より

「幻想的小品集」は、モスクワ音楽院作曲科を卒業した1892年に作曲された5曲からなる小品集である。同年12月にラフマニノフ自身によって初演され、音楽院の恩師アントン・アレンスキーに献呈された。第2曲「鐘」が非常に有名だが、他の曲も若き日の作曲家の情熱と魅力にあふれている

第2曲「鐘」(レント、嬰ハ短調) 大聖堂の鐘の音で有名な古都ノヴゴロドで育ったラフマニノフの音楽にはしばしばその響きが現れるが、ここではロシアの憂愁をまとった鐘の音が音楽全体に広がる。

第1曲「エレジー」(モデラート、変ホ短調) 左手の音域の広い分散和音によって哀愁を帯びた旋律がたっぷり歌われる。静かな情熱を秘めた中間部を経て、主部が再現される。

第4曲「道化役者」(アレグロ・ヴィヴァーチェ、嬰ヘ短調) 道化役者とは、イタリアの伝統的な風刺劇コメディ・デラルに登場するブルチネッラのこと。軽やかに飛び跳ねるおどけた序奏に続いて、明るく力強い音楽が始まり、ピアニスティックな華やかさも盛り込まれている。

柴辻純子(音楽評論家) Junko Shibatsuji

サロン小品集 Op.10より

「サロン小品集」は、1893年12月から翌年にかけて作曲された。当時のラフマニノフは、チャイコフスキー、ズヴェーレフと尊敬する音楽家の計報が続き、ひどく落ち込んでいた。この曲集は、彼らの時代を懐かしむような、サロン風の7曲の小品で構成されている。

第3曲「バルカローレ」モデラート、ト短調。開始の右手の波打つような三連符の伴奏からくっきりとした旋律が左手で歌われ、次第に右手の音型は細やかに軽やかになる。

第5曲「ユモレスク」アレグロ・ヴィヴァーチェ、ト長調。付点8分音符を含む軽快な音型の反復に続いて、シンコペーションの力強い和音の連続、突風が駆け抜けるようなフレーズが次々と現れる。中間部(アンダンテ)はたっぷりと歌われる。ラフマニノフが生涯を通じて愛奏した曲の一つ。

10の前奏曲 Op.23より

ラフマニノフは、モスクワ音楽院卒業後、洋々たる未来が開かれた音楽家として活動を開始したが、自信を持って発表した交響曲第1番の初演(1897年)が大失敗に終わり、精神的不調に陥った。しかし1900年初めから受けたニコライ・ダーリ博士の心理療法の効果もあって、音楽への情熱を取り戻した。「10の前奏曲」は、一部は1901年に着手され、1903年に完成した。10曲はすべて異なる調性で書かれ、長調と短調の曲が交互に配置されている(偶数番号が長調、奇数番号が短調)。最終的には「鐘」Op.3-2と「13の前奏曲」Op.32(1910年)と合わせて、平均律のすべての長短調を用いた24曲の前奏曲となった。

第2番(マエストーソ、変ロ長調) 曲集のなかで最も華やかで祝祭的な歓喜に満ちている。左手の伴奏は広い音域をかけめぐり、右手はオクターヴによる力強い主題で進められ、装飾的な中間部を経て、いつそう力強く響く主部が再現される。

第4番(アンダンテ・カンタービレ、ニ長調) ショパンのノクターンを思わせる音楽。甘い旋律が穏やかに歌われ、ラフマニノフらしい劇的な盛り上がりもみせる。

第7番(アレグロ、ハ短調) 16分音符の音型が広い音域で激しく動き回り、この曲はショパンのエチュードを思わせる。

第5番(アラ・マルチア、ト短調) ラフマニノフの前奏曲で、「鐘」とともに有名な1曲。曲集の中では最も早く1901年に着手された。行進曲のリズムは、ラフマニノフの作品にしばしばみられるが、冒頭の明確なリズムは主題に規律と緊張感を与える。中間部は抒情的な旋律が大きな広がりをもって響く。

絵画的練習曲集 Op.39より 第7番 ハ短調

ヴィルトゥオーゾ的な技巧性と音による絵画的表現を結びつけたこの曲集は、ラフマニノフのロシア時代の最後の作品。1916年から翌年にかけて作曲され、1917年2月に作曲者自身のピアノで初演された。同じタイトルの前作Op.33(1911年)よりも、スケールが大きく、技巧的要求はさらに高くなり、音楽は大胆になった。ただ曲集全体には当時のロシア情勢を映し出すかのように暗い影が広がり、全9曲のうち8曲が短調で書かれている。

第7番(レント) ラフマニノフが「葬送行進曲」と述べたように、重たい和音の連続で始まる。美しい和声進行や執拗な反復音型など、音楽的にも技巧的にも高度な表現を含み、やがてその頂点で鐘の音が鳴り響き、再び葬送の行進となる。